素晴らしい能力を秘めている幼児期の子ども達

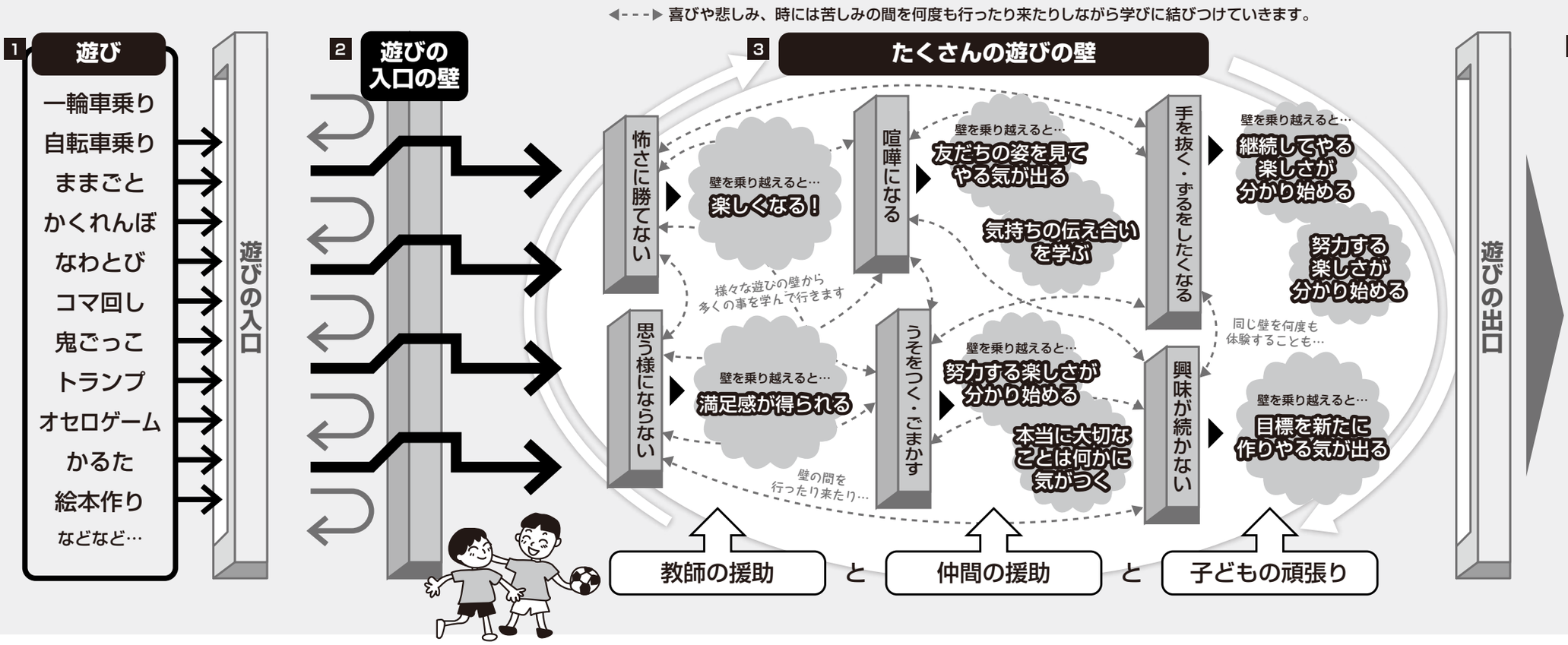
― その力を発揮するまでの係わり方 ―

「めんどうな事はさけて通る」
「大人の目の届かないところでいじわるをする」
「いつも途中であきらめ、中途半端な行動をとる」
「集中せず、いつも注意散漫な行動をしてしまう」
「自分の都合ばかり考えた行動をとる」
以上のような人間に育って欲しいと願う親御さんはおそらくいない事でしょう。

保育現場におりますと、すでに幼児期に全て前で述べたような言動と逆の姿を子ども達が表すことに気づかされます。

むしろ、 めんどうなことをめんどうと思わず楽しく行動し**自らの意思で相手の状況に合わせた優しさ**を表し、途中で様々な問題に直面しても**強い意志**を持ち、それを乗り越えようと**集中して取り組む粘り強さ**があります。

これらがどの子ども達からも感じられます。
まさに何でも柔軟に吸収できる幼児期だからこそ、人格形成の基礎づくりが適していると言えるでしょう。



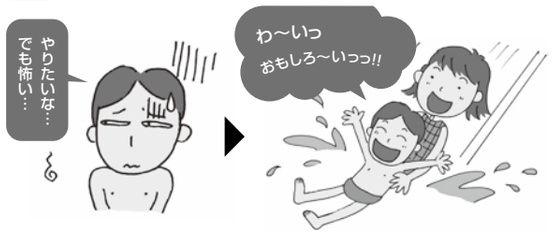
1 遊びは学びの入口

幼児はなんでもすぐ興味をもち、すぐやり始めます。
行動力が抜群です。（結果を予測はしません。あまり先のことは考えませんのですぐ行動に移せるのです。）

2 遊びの入口の壁

でも、そのほとんどはほんの少しつまむ程度であまり興味が持続せず、すぐにあきてしまい、入口に戻ってきてしまいます。
行ったり来たりを何度も楽しみます。

3 たくさんの遊びの壁を乗り越えて、子ども達は学んでいきます。



でも、その中で子どもの発達にあった遊びや興味関心を持った遊び、仲間の中で流行っていて互いに切磋琢磨して遊べる遊び等、子どもがやり始めた遊びや提供した遊びを　教師は目を離さず見守り必要に応じて援助し特に行き詰まったり、つまづいたりした時に対応していきますと、その遊びは子どもの能力をたくさん引出し、遊びの出口へと向かいます。喜怒哀楽の体験をたくさん実感しながら様々な困難を乗り越えていきます。

この時の教師の指導の要点

・一人ひとりの子どもに**丁寧**に関わり、遊びの出口に至るまで**手を抜かず責任を持って**関わる。（子どもが充実感を味わい、成長が見られるまで）

・遊びの入口から出口に至るまでの間は**最短距離をとらず**、たくさんのアクシデントと向き合いながら、**急がず、寄り道をたくさんする**という**経験の幅** を広げ、**豊かに**させることが大切です。（成功や失敗を何度も繰り返しながら子どもは手応えを実感していきます。）

・個人と関わりながらも、その側にいる子ども達を常に意識して関わり、間接的ながらも集団を意識して対応していくと、周りで見ている子、聞いている子の育ちにも繋がっていきます。

・この「遊びの壁」を乗り越えるために大切な事は、「子ども本人の頑張り」はもちろんのこと、「仲間の援助」を取り込んでいくことを常に意識していきます。

4 遊びを通して学ぶ事の大切さ

その結果、「出来るようになる」という形に見える成長もありますが、成果が上がるまでの様々な経験が心と体を豊かにし、結果的に大人がびっくりするような能力を発揮します。